Japan Society of Research on Early Childhood Care and Education

170

小学校入試模擬テストを受験する子供の実態と母親の意識 I

○横山知弘 ・横山範子 ・横山さつき ・徳田克己 ・高玉和子 ・高橋彰彦
(筑波大学附属聾学校) (桐花教育研究所) (東京成徳短期大学) (彰栄保育専門学校) (嬉泉療育相談所)

はじめに

最近「より個性的な教育」に対する期待が高まり、小学校から私立学校へ入学を希望する親が増えてきた。それに従い、私立小学校の入学試験の競争率が高まり、入学試験の準備のために特別な勉強をするケースが増加してきている。

従来より、幼児が入学試験準備のための勉強をすることは、幼児にとっては好ましくないことであるという認識が広くあった。しかしながら、そのことに関する調査や研究はなく、実態は明らかにされていない。そこで小学校入試のための勉強をしている幼児およびその母親を対象として入学試験準備の実態を調べ、小学校入試に対する両親の態度と入学試験のための勉強を通して子供にどの様な変化があったかを明らかにするために本調査を実施した。

方法

1．対象児

平成元年１０月２２日に桐花教育研究所においておこなわれた小学校入試模擬テストを受験した年長児140名とその母親を調査対象とした。対象児のうち男子は58名、女子は79名であった。また性別についての無回答者が３名いた。

2．手続き

本調査は小学校入試模擬テストの会場において本論文の第一著者によって実施された。回答はすべて無記名でおこない、１時間以内に終了した。この調査を実施したのは私立学校の受験開始日の９日前であった。

3．調査用紙の内容

調査対象児の小学校入試の準備の実態を調査する調査項目を２４項目、小学校受験に対する母親の意識を調査する項目を４０項目、小学校入試のための勉強を始めてから対象児が変化した点を調査する項目を２６項目、計９０項目を用意した。

子供の実態

1．兄弟の数

今回の調査の対象となった幼児のうち一人っ子である子供は24.0%、２人兄弟である子供は58.6%、３人兄弟であるものは14.3%、４人兄弟である子供は3.0%であった。

2．出生順

対象児のうち長男、長女は全体の49.6%（一人っ子を含む）、次男、次女は全体の41.4%（末っ子を含む）、三男、三女は全体の7.5%（末っ子を含む）であった。

3．父親の学歴

対象児の父親のうち大学卒の者は88.6%、大学院卒の者は8.6%であった。すなわち、大学卒以上の高学歴を持つ者は97.2%であった。

4．母親の学歴

対象児の母親のうち大学卒の者は80.7%、大学院卒の者は4.3%であった。すなわち、大学卒以上の高学歴を持つ者は85.0%であった。

5．母親の職業の有無

対象児の母親のうち定職に就いている者は17.9%であったが、パートタイムの労働をしている者はいなかった。残りの82.1%の者が専業主婦であった。

6．父親の受験経験

対象児の父親のうち幼稚園を受験したことのある者は6.3%、小学校を受験したことのある者は16.2%、中学校を受験したことのある者は22.5%であった。

7．母親の受験経験

対象児の母親のうち幼稚園を受験したことのある者は7.8%、小学校を受験したことのある者は15.0%、中学校を受験したことのある者は30.0%であった。

8．対象児の幼稚園入園時の受験経験

84.0%の対象児は幼稚園を受験した経験がなく、小学校入試が最初の受験であった。

9．受験する小学校数

対象児のうち１校のみ受験する対象児が22.6%、２校受験する対象児は29.3%、３校が32.3%、４校6.8%、５校4.5%、６校1.5%であった。すなわち74.4%の対象児が複数校を受験する予定であった。

１０．小学校受験を考えた理由

両親が子供の小学校の受験を考えた理由を表１に示す。表１にあるように小学校を受験させる理由のうち「大学までの一貫教育」（これ以上受験の苦労をさせたくない；幼いうちなら苦労したとは知らずに受験する；ずっと同じ校風で育てた方が教育上望ましいなど）に関する理由は39.2%、「校風が良い」（先生が気に入った；環境が良い；伝統がある；いじめがない）が15.0%、「子供の個性を大切にしたい」（のびのびと育てたい；子の能力が充分に伸ばせる）が9.7%、「自分の卒業した学校に入れたい」（キリスト教、仏教などの宗教上の理由；父母と同じである）が10.8%、「公立では不安なため」（教育が不安；学力レベルの低さ；評判が悪い；いじめがある）が13.1%、「上の子と同じ学校に入れたかった」が4.0%、「子供の希望」が1.7%、「無記入」が6.8%であった。

１１．お稽古ごとの数と費用

お稽古ごとをいくつおこなっているかを尋ねたと

NII-Electronic Library Service

Japan Society of Research on Early Childhood Care and Education

表１ 小学校受験を考えた理由

大学までの一貫教育を受けさせたい	69(39.2%)
校風が良い	26(15.0%)
子供の個性を大切にしたい	17(9.7%)
自分の卒業した学校に入れたい	19(10.8%)
公立では不安なため	23(13.1%)
上の子と同じ学校に入れたい	7(4.0%)
子の希望	3(1.7%)
無記入	12(6.8%)

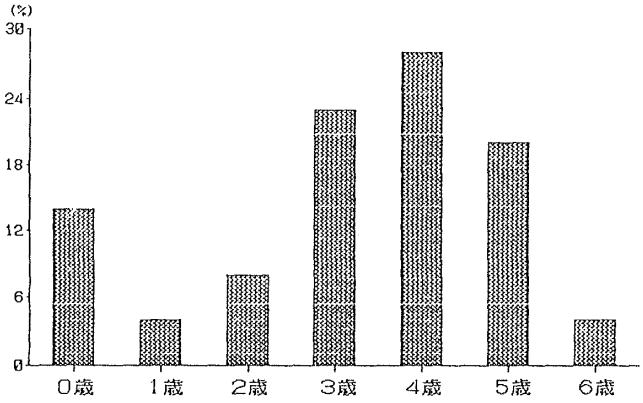

図１ 小学校受験を決めた時期

表２ 不合格後の処置

公立の小学校（越境入学含む）	84(65.1%)
中学校で受け直す	20(15.5%)
編入試験を受けさせる	8(6.2%)
子にあっていそうな所に入れる	8(6.2%)
落ちてから考える	5(3.9%)
その他	4(3.1%)

ころ、今回の調査では平均で２つであった。またお稽古ごとにかかる費用を尋ねたところ平均で月額16289円であった。対象児がおこなっているお稽古ごとは、ピアノ(22.1%)、体操(19.7%)、プール(19.3%)、絵(14.8%)、英語(4.1%)、モダンバレー(3.7%)、エレクトーン(2.9%)、サッカー(2.9%)、バイオリン(2.5%)、歌(1.2%)、公文(1.2%)、コンピュータ(0.4%)、モダンダンス(0.4%)、剣道(0.4%)、習字(0.4%)、ソルフィージュ(0.4%)であった。

１２．受験のための特別な勉強

対象児のうち88.2%が受験のための特別な勉強をしていた。

１３．家庭での受験勉強

家庭で受験勉強をしていた対象児は17.0%にすぎず、83.0%の対象児が家庭では受験勉強をしていなかった。

１４．幼児が教室に通う頻度

教室に通っている対象児は全体の94.3%であった。また、教室において勉強する時間は一週間あたり、平均で3.4時間であった。

１５．受験する小学校の選択基準

受験する小学校を選択した理由は「校風が良い」(27.9%)、「自宅から近い」(13.3%)、「子供の個性を伸ばせる」(11.6%)などであった。「将来の進学に有利」などの高校・大学への進学に関する回答は8.1%にすぎなかった。

１６．受験のための教育費

受験準備のための教育費の月額は平均で6.74万円であり、最高月額は２０万円であった。

１７．受験準備のための模擬テスト

受験準備のためのテストの受験回数は平均で年に7.14回であった。最も多い対象児は模擬テストを年間４０回受験しており、最も少ない子供は今回が初めての受験であった。

１８．模擬テストの結果の利用

模擬テストの結果を細かく検討して次のテストに役立てていると回答した母親は全体の63.6%であった。

１９．受験させることを決めた時期

受験させることを決めた時期を図１に示す。図１にあるように、小学校を受験することを０歳の時に決めていた親は全体の14.3%であり予想外に多かった。子供が１歳の時に決めた親が3.8%、２歳の時に決めた親が8.3%、３歳の時に決めた親が22.6%、４歳の時に決めた親が27.8%、５歳の時に決めた親が19.5%、６歳の時に決めた親が3.8%であった。

２０．受験についての両親の考え

子供の受験について、両親ともに賛成している家庭は全体の95.6%、母親が賛成し父親が反対している家庭が4.4%であった。

２１．不合格後の処置

不合格であった場合の行動予定を表２に示す。公立学校に入学させるという回答が最も多かったが、中学校で再び受験させるという回答が15.5%あった。また編入試験をうけさせるという回答が6.2%あったことも特長的である。

２２．勉強をいやがったことの有無

対象児が入試準備のための勉強をいやがったことがあるかどうかを尋ねたところ、半数近く(46.7%)の対象児が勉強をいやがった経験を持っていた。これには「環境の急激な変化」、「母親のおしつけ」、「強制されることへの子供の反発」などが考えられるが、このことについては今後、新たな調査をおこなって詳細に検討していきたい。

NII-Electronic Library Service